



1、 活動の概要

私たちの活動はフードドライブを基盤とし、地域の方々との交流を強めると共に、フードドライブの認知度を高めていくことが目的である。その目的に加え、食品ロスへの問題解決の第一歩として、料理教室を開催するプロジェクトを考案した。

以下、そのプロジェクトの説明である。

2、 フードドライブとは

家庭で余らせていたり、食べられるのに捨ててしまう、いわゆる食品ロスになってしまうものを、学校などの集まる施設で寄付を募り、フードバンクと呼ばれる場所へ食品を運んだ後必要としている人の下へ届けられるなどして再利用をしようという活動である。だが、集められるものにはいくつかの規定が存在する。集める食品は、2か月以上の賞味期限であること。なので、生鮮食品などは集められない。もちろん未開封であることが絶対条件であるので、包装が破損しているものや、包装が剥がされているものも対象外となる。また、フードドライブを基盤として運営できている代表的なものがある。それがこども食堂である。このこども食堂は、フードドライブで集めた食材をもとに、低価格で料理を提供する食堂である。

3、 フードドライブの現状

そもそもフードドライブというものは、どのようにして発案されたのか。

その背景には、世界中で出される食品廃棄

物の量や、まだ食べられるにも関わらず、なんらかの理由で捨てられてしまっている“食品ロス”と呼ばれる食糧の量が年間で約 250 万 t も出ている反面、食べ物が十分に得られず“飢餓”と呼ばれる人達もいる現状がある。

そこで改善策として挙げられたものの1つが「フードドライブ」なのだが、これ自体にも様々な問題点がある。主なものをまとめると、

- ・開催場所が少ない。
- ・認知度が低い。
- ・集められる食材に鮮度や期限的な限りがある。
- ・食品の安全面での保障元が曖昧。

などがあげられる。一見、「食品ロス」と「飢餓問題」が減少し一石二鳥に見えるプロジェクトだが、食品を扱うという性質上、上記のような問題が発生する

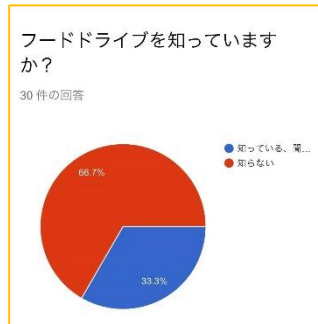
4、 活動の動機

私たち Y ゲームスは、フードドライブの活動の最大の問題点は、現状の認知度の低さによって参加者が少ないことだと考えている。そのため、認知度の向上に焦点をあて、話し合いを重ねていった結果、フードドライブの活動は日常的なものではないということが、記憶に残りにくい原因なのではないかと考えた。ではどうすれば記憶に残るのが問題となる。そして、身近なことで体験でき、楽しいものならば記憶に残るのではないかと考えにまとまった。フードドライブを基盤にでき、日常生活のなかで必要なものからなっていて、楽しいと感じられるものを考え、料理教室という考えに至った。

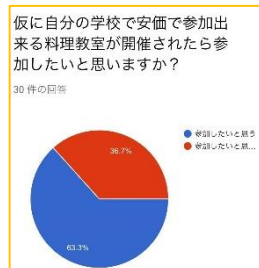
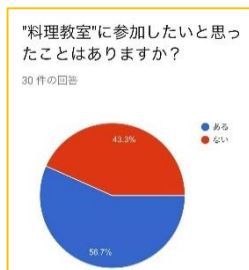
5、調査

私たちYゲームスは今回、フードドライブに対する調査を多くの方々に回答してもらうべくインターネット上のアンケートを用いて対象年齢、職業等を限らず行った。

初めに、フードドライブ自体の認知度を調査した。結果、「知っている」と答えた人は30人中33.3%の10人、という結果になった。この結果からもわかる通り、フードドライブの認知度は比較的低いことがわかる。



次に、料理教室への意欲も調査した。結果としては、料理教室へ参加したいか、というところでは30人中56.7%の17人が「参加したい」と回答し、自分の学校で開かれたとしたら参加したいか、というところでは63.3%の19人が「参加したい」と回答し、身近なところで開かれる方が参加意欲が見られた。



6、私たちの過去の活動

私たちが、何故フードドライブに着目したのかというと、上記で記載した飢餓と食品ロスの解決策のひとつであるという前に、フードドライブという活動を実際に行ったからである。私たちYゲームスは山崎高校生徒会の一部メンバーで構成されているチームであり、2018年度の山崎高校文化祭で生徒会の企画として実行した。この企画では、約37人もの方々に寄付をしていただき、量としては、段ボール箱3つ分を埋められるほどとなった。そして、私たちはこの経験を活かして、近隣の小学校への訪問授業を行ったり、こども食堂訪問をすることもできた。このこども食堂で提供されていた食べ物は、種類も多く、十分な量もあった。このことから、私たちはフードドライブを基盤にしたこの企画を実行できるのではと考えた。

7、プロジェクト内容

諸々の事情により、実際に実施するにはいたってはいないが、プロジェクト自体は形になりつつある。

① 食材について

フードドライブが基盤で実施していく予定なので、基本的には参加する人や近隣の人の協力を募り集める。だが、フードドライブで集められる食品には記載したとおり、多くの規定が存在している。しかし、フードドライブで集められる食品は上述したように多くの規定が存在するため、これに従うこと集まる食材に偏りが出ると予想され、メ

ニューに制限が出る恐れがある。そのため、私たちは以前訪問したことがあり主に子供を対象に安価で食事を提供している子ども食堂と交渉し、同施設が提携している農家などと提携できないかと考えている。協力を得られれば、形の悪いものや企画外の大きさになってしまったもの、いわゆる訳アリ商品などを安く、又は無料に近い価格で譲ってもらい、料理教室を開催できるのではないだろうかと考えている。

② 場所について

料理のできる設備が整っていることが絶対条件であるのだが、衛生面や、責任者関係の問題が難しく、第一候補であった私たちの高校にある家庭科室は断られてしまい、現在料理の専門大学に交渉中である。

③ 安全面、衛生面について

フードドライブを基盤に行うということは、集めた食材を使用するということである。そうなれば、アレルギーや、どこの商品なのか、賞味期限が過ぎていないのかなどの心配があるであろうことを考え、使用する食品はメーカー名やアレルギー物質の記載した一覧表などを製作し、掲載、又は配布しようと考えている。衛生面に関しては専門知識のある方に指導していただく、それに加え、現在交渉中である大学講師の方に付き添いを希望している。

④ 期待される影響と今後への発展

未だに問題点は多数存在しているのは確かであるが、メリットももちろん存在している。最初に記載したとおり、このプロジェクトは日常に関係が深く、楽しく、体験型であ

り、記憶に残るものである。長く記憶に残ることができるのならば、その分認知度はあがったということと同義ではないだろうか。また、このプロジェクトは地域とのつながりが重要となると記載したと思うが、考え方を変えると、地域とのつながりを強くする機会なる。そして、地域とのつながりが強ければ強いほど、準備の時間は短くなり、ほかの方々も実際にできるのではないだろうか。そうなれば、さらに認知度は上がり、飢餓に対しての取り組みはよりいっそう強固なものとなるのではないだろうか。夢物語であることは十分承知であるが、そうなることを願わずにはいられない。と、思わないだろうか。